

行雲流水

No.53 令和3年6月3日発行

こだわらない心・とらわれない柔軟な心

校長 寒河江 正人

ずいぶん以前のこと、ある方からお聞きした「お話」です。

むかしむかし、若い僧侶と年配の僧侶が、修行の旅をしておりました。

旅の途中、二人がたいそう急な川のほとりに辿り着いたところ、一人の女性が川を渡れず困っておりました。

若い僧侶が「修行中の身にある者は女性に触れてはならない」という戒律があることで、どうすべきか悩んでおりましたところ、年配の僧侶は、何も言わず、そっと女性を背負い、川を渡り、向こう岸で降ろし、何事もなかったように、また歩き出しました。

若い僧侶は、その行動に驚き、戸惑い、じっと考えながらともに歩き続け、しばらくして年配の僧侶を次のように諫めました。

「修行中、僧侶は女性に触れてはいけません。それなのに、女性を背負って運ぶなんて。あなたは戒めを破ったではありませんか。」

すると年配の僧侶は、こう答えました。

「私は、すでに女性を岸辺に降ろしてきたが、お前はまだ背負っているのではないのか？」

若い僧侶のように、「女性」にとらわれる。「戒律」にとらわれる。

そのために「適切な判断」ができず、「今、成すべきこと」を成せなくなってしまう。

さらに、いつまでも「もう過ぎたこと」に固執しているようでは、「今、成すべき目の前のこと」に対応することはできません。

人間というものは、ともすれば、何かにとらわれて、迷ったり、人間関係をこじらせたりしがちなものです。

私自身のこれまでを顧みても、日々小さなことに憤ったり、他人のことを羨んでみたり。でも、そうした「私心」をもっていない人は、おそらくこの世には一人もいません。

大切なことは、そういう自分の「愚かさ・醜さ」をあるがままに、否定せず認めてやり、それ以上、「もう過ぎたこと」には「こだわらない・とらわれない思考習慣」を身につけて行動するということでしょう。

私も、まだまだ「修行」が足りず、この年配の僧侶のような判断・行動には及びません。